

佳作

絵本のおねえちゃん

畠山 菜穂子

柳田先生、こんにちは。先生へお手紙を書くのは三度目となります。三年前、はじめての子育てで赤ちゃんどうコミュニケーションしてよいかわからず、とりあえずはじめた絵本の読み聞かせでした。ところが、読み聞かせていただけの娘がページをめくったり、言葉を発したりと、絵本はみるみる変化する娘の成長を実感させてくれました。絵本は娘とじっくり向き合う時間をつくってくれるかけがえのないものとなりました。

娘と読む絵本は、あまり考えずに出会ったものをどんどん試しています。しかし、どうしても出会ってすぐ娘と読めない絵本がありました。それ

は、「ちょっとだけ」という絵本です。本屋のポップアップでおすすめされており、表紙の女の子が可愛くて何気なく手にしました。内容は、赤ちゃんが生まれて、ママが今までのように女の子に手をかけられなくなったので、女の子は幼いながら自分で色々やってみるといいうものでした。はじめてこの絵本を読んだ時、幼い子のひたむきにがんばる姿があまりにいじらしくて、涙が溢れました。そのため、涙を隠すことに精一杯で絵本を購入するどころではありませんでした。その後図書館などでこの絵本を見かけると、そつと絵本を開いてみるのですが、やはり涙をこらえられず、娘とすぐにこの絵本を共有する気になれませんでした。

さて、今年の7月に男の子を出産しました。二

人目の出産に当たって一番気がかりだったのは、三歳になる甘えん坊の娘の気持ちでした。赤ちゃんが生まれて娘はとても喜んでいましたが戸惑いは大きく、弟の出生後すぐ高熱で一週間寝込みました。笑顔は減り、弟のことは名前で呼ばず「赤ちゃん」と呼ぶなど、なかなか弟を受け入れられずにいました。

このような中、帰省先で突然娘に「ちよつとだけ」を読むことになりました。実は、下の子の妊娠がわかって真つ先に「ちよつとだけ」の絵本を思い出し、こつそり購入していました。ただし、娘には「おねえちゃんなんだからもつと一人でがんばりなさい」と言うような気がして、この絵本を読む気になれませんでした。私はただ自分のためだけにこの絵本を購入し、帰省先にまで持って

いっていました。しかし、母にこの絵本を貸した際の行き違いで、絵本がリビングに置きっぱなしになっていました。絵本はあっさり娘に見つかり、私はすごく気まずく思いました。娘は女の子が赤ちゃんを抱っこしている表紙の絵を見て何か感じたのか、「なにこの本！」とただならぬ様子だったので、私は覚悟を決めて「ちよつとだけ」を娘と読むことにしました。「ちよつとだけ」を娘はじつと聞いていました。読み終わるとすぐ、もう一回とせがみ、何回も読むことになりました。繰り返し読む中で娘は主人公のなつちゃんの行動にいちいち「なんで？」と聞いてきました。例えば、「なんでこの子、牛乳こぼすの？」と娘。私は「一人で牛乳をそそぐのがはじめてだから、こぼれちゃったね。」という具合でした。娘は「ふーん」

と、どのように受け止めているのかわからない反応で、私は内心ひやひやしていました。

それから数日後、私が下の子を抱くと娘が突然「私も赤ちゃん抱っこする」と言い出しました。娘が抱っこするのはまだ難しいと思い、「すごく重いから手が痛くなっちゃうよ」とあきらめさせようとしました。ところが娘は「あの子も抱っこしてた!」「私もできる」と言いました。はじめ、「あの子」がどの子なのかわかりませんでした。ふと「ちょっとだけ」の表紙の絵が頭をよぎりました。「あの子ってなっちゃん?」と娘に聞くと、娘は「そうそう!」と力強くうなずきました。なるほど、娘にとってなっちゃんは困難な状況を突破する同志と映ったのか。娘より少し先におねえちゃんをがんばっているなっちゃんの姿に娘が大いに

励まされたのがわかりました。絵本を隠したのは私の杞憂で、「ちょっとだけ」は、娘の背中を力強く押し、新しい一歩を踏み出させてくれました。私はなっちゃんに「娘のおねえちゃんにもなってくれてありがとう」と思いました。

〜柳田邦男先生からのメッセージ〜

二人目の子が生まれると、上の子への対応が難しいですね。上の子が戸惑うだけでなく、母親にとってもあれこれ迷う場面が多いと思います。そういう母親の迷いが、絵本『ちょっとだけ』の上の子への見せ方をめぐって、丁寧に語られているので、同じように二人目の子が生まれた母親にとっては、とても参考になる手記だと思います。

子どもは三歳ともなると、何事につけ、「どうして?」とか「なんで?」と尋ねて、物事をきちんとして理解しようとする欲求が強くなりますね。そうすることで言葉や知識を増やしていくのですが、同時に、状況を理解して、自分なりに問題にチャレンジして乗り越え、納得感を得ようとする心の動きが活発になります。

そういう時期に、自分と同じくらいの子が登場する絵本を読むと、共感をもって同じように振るまうのですね。畠山さんは、上の子にとって、『ちよつとだけ』のなつちゃんは「困難な状況を突破する同志」と映ったのかと書いていますが、ずばり言い当てていると思います。